

巻 頭 言

学校長 村上英治

附属学校の研究紀要第28巻が上梓される運びに到った。毎年毎年のそれこそ地道な研究の集積がここに示される。

その設立の趣旨からして、一般中等教育の基本的ありかたに即し、実践現場での教育活動を推進していくとともに、ここでの教育課程を、教育内容を、さらにまた生活指導を、多面的に検討し、教育研究をきびしくおしすすめていくことが、本附属学校教員に要請されている課題でもある。この研究紀要に寄せられた諸論文、諸報告が、それらの課題にこたえる成果の一端であるといってもよい。

附属学校での教育研究を具体的にどのようにおしすすめていくべきか。長年にわたって問いつづけられてきた課題でありながら、なお現段階においてこれぞといった解決は得られていない。いやむしろ問題ははいよ多岐にわたっているこの頃である。

このところ特に論議をよんでいるところでは、学部との共同研究のもちかたがある。全附属高校部会の昨年の大会においても、かなり熱心に検討されたところではあるが、たしかに学部と附属学校とが一体となって、共通の課題にまったく同じ次元で取り組むことはきわめてむづかしい。ともすれば、学部主導の研究に附属学校が資料を提供するなり、被験者の便宜をはかるとかいった形での協力が、一方的に要請されたり、附属学校側でとりあげられた課題に、学部教官からの助言なり示唆なりを求めたりするといった、どちらかといえば上下の關係に規制されやすい現状だからでもある。

一般中等教育のありかたを理念的原理的に研究をすすめていくのが、それを担当する学部教官に課せられた責務であり、教育の現場で実践的に展開していくべき課題は、附属学校教官に寄せられている。お互い車の両輪として共に相補・補完の立場で、その識見を提起し、それを現場で検証し、改めて理論的探求をつづけていくといった、両者一貫となった共同研究体制を確立していくことが、今日もっとも要望されているのである。

当然のことながら、附属学校での研究は、以上の視点からしても、実践研究といった立場を失うものであってはならない。日々に新たな教育現場での、その都度その都度の課題に取り組んでいく究極の目標は、や

はりその教育の場を生きぬく生徒自身の成長発達に直接資するものたるべきであろう。教育という営為自身の中核を占めるものは、どこまでも主体的に思春期をいきいきと、生きつづけていこうとする内的人間の形成にあるとする限り、ここでの教育研究のありかたは、どこまでもいわゆる“生徒のために”なされるべきものであって、一般原理の追求・法則の定立のみを目途とする“生徒による”研究に終始してはならないと考える。

昨秋、私どもの学校では、「中学・高校教育の今日の課題」を標榜して、中等教育研究協議会を持つことができた。教科の枠をこえた教育研究活動を求めて、「教育課程」「授業研究」「総合学習」「生活指導」といった4つの側面からの多面的・総合的な研究を、全教官一丸となっておしすすめてきた成果を報告したのである。私どもの自己研修の総決算であり、総点検でもあるこれらの研究成果を、自分たちだけの討論にとどめないで、広く開放して大方の批判を得ることによって、よりきびしい自己規制をはかろうとする、こうした研究協議会をもつことは、それらを常に<研究のための研究>にとどめることなく、教育現場にフィード・バックさせ、何よりも教育営為の主体ともなるべき、生徒自身のより望ましい成長発達に寄与することを祈念しての歩みにはかならない。附属学校の発足以来30数年、あるときには毎年、またときには数年間隔で、この研究協議会を独自に主催してきた基本的構想がここにある。

昨年の研究協議会で、上述したように副題として、<教科の枠をこえた教育研究活動>をうち出したのには、またそれなりの意味がある。学校教育の場にある研究活動であることからして、特に教育課程の基準の改訂に伴ない、新しい教育課程を編成していく上で、「新しい学力」とは何かを摸索してきた、これまでの研究の方向性をも推進しながら、今回は教科ごとに独立せず、教科間に共通する共同の課題を摸索し、さらにまたいわゆる教科外活動の望ましいありかたを検討することに焦点をあてることにしたのである。何よりもこれは、実践研究を重視する方向に即して、これら<教科の枠をこえた>活動が、主体的人間形成の場としての価値づけを賦与し、生徒自身の主体性・自主性をひき出し、自己実現への道を援助する教育活動につ

なるといった位置づけを確かめるものに他ならない。公開授業もこの線に沿った試みで行われた。附属学校における教育研究の本質を問いかけようとの意図もある。本紀要所載の報告をとおして、この方向性をよみとっていただきたい。

時代とともに広い意味での国際交流の輪は広がっている。附属学校においても例外ではなく、多くの交流の機会が身近でおこりつつある。今年度に入ってから西独の女子中学生の一日入学をうけいれた。また、ニュージーランドの留学生の教育実習的体験の希望にも前向きに対処してきている。台湾からの大学院生に対しての調査の便宜もはかった。言語センターで学ぶ留学生の方々とサッカーの合同練習もたびたび行われもした。

さらにまた、今春の入学試験に際しては、帰国子女学級を終了した中学生の高校進学希望に対しても多くの論議を重ねた。結果的には受け入れることができなかったけれども、全国的に要請されている帰国子女教育の問題についても今や避けて通ることのできない現状に直面させられている。それにもとづく施設拡充・教官の定員増といった物理的・人的メリットはともかく、それ以上に、附属学校の教育研究の特質を強調するならば、この種の国家的要請をも勘案しながら、今日的課題としての国際化に即して、海外との文化交流の意義を今少し検討すべく、一歩すすめる時期に到っているようにも思われる。

そのためには、安易に実験的といった形で試行錯誤を試みるのではなく、より積極的に前向きに、さまざまな事情・状況を調査したり、先駆的实践に学ぶなど、基礎的研究を着実に今後積み重ねていくことが必要となろう。

一般普通教育を行う場としての附属学校である。そこではほんとうに心身ともに健康な中学生・高校生が、自分たち独自の、一回限りのいのちを謳歌して、のびのびと生きつづけている。思春期の青少年の息吹きが躍動する。限りない可能性を実現すべく懸命に歩んでほしい。そこには明るい未来が開かれているのである。

それだけにこそ、30年あまり臨床心理学を専攻し、障害をもつ人びとのかかわり多かつた私としては、これら健常人たちに、障害者の心の痛みを分ってほしいとの念願がある。

障害者の福祉・心理についての研究は、今日の状況においてあまりにも多い。私自身も昨秋、これまでの実践をもとに、心身障害児との取り組みを、「障害重い子どもたち — 集団療育の場で — 」としてまとめ、福村出版から上梓した。心傷つき魂病む精神病者との取り組みからも、「心理臨床家 — 病院臨床の実践 — 」として、これまた昨年暮には誠信書房から世に問うことができた。ただ障害児者への理解は、決して一般的な解説書を読み、頭で考えるだけでは深まるものではない。私自身これらの書物で訴えたかったのは、文字どおりかかわり重ねての交流体験である。その意味において昨年、私どもの学校に車椅子の生徒をうけいれたことは貴重な体験だったと思う。本人と母親をはじめとする家族の努力、そして本校教官・生徒全員の暖かい配慮と励ましによって彼は無事高校を卒えることが出来た。その後のうけいれが不十分なのが気懸りではあるけれど、この1年近く、この学級をうけいれて学校全体が学んだことは多い。何よりもそれを特別ごとにしてしまわなかったことを私は喜ぶたい。統合教育・交流教育といった方向性がこうして静かに定着することを望みつつ、この入試には、難聴学級で学んできた小学校の入学希望に応じもした。これまた、結果的にはクジ運に恵まれず、こうした交流の拡がりを展開することは出来なかったけれど、その素地は育ってきているようにも思われる。教育がほんとうにすべての人のものになるために、いかなる人をも排除しないで、それこそ共に育ちあっていく実践をつづけることをめざして、この種の方向の研究をも、より一層附属学校で推進していきたいと思っている。

(昭和58年5月22日)